

つっかえを発話パターンとして認定させる話し手の能力 Linguistic Skill Makes Dis-fluent Stuttering a Competent Method of Speech

定延 利之[†], 杜 思宇[‡]
 Toshiyuki Sadanobu, Siyu Du

[†]神戸大学, [‡]神戸大学 (大学院生)
 Kobe University, Kobe University (Graduate Student)
 sadanobu@kobe-u.ac.jp, toshiu@hotmail.com

Abstract

Japanese language has various types of word-internal stuttering like “te, tempura” “te, mpura” “teetempura” and “teempura”. Although they are dis-fluent, they reveal information about the speaker. This is because the type of stuttering varies in accordance with the speaker’s attitudes. In Japanese communication stuttering is not just an ignorable mistake but a meaningful pattern of speech. How is this possible? We claim that the answer is concerned with the basic skill of pronouncing segments clearly with the right accent. The speaker must be good at this in order to enable his/her stuttering to be interpreted as a competent pattern of speech. Previous studies on stuttering have focused on stuttering by native speakers. However, our experiments, which involved not only native speakers but also Japanese learners and sound synthesizing systems, support the above hypothesis. Compared with stuttering made by Japanese native speakers, stuttering made by Japanese learners (in elementary class) and sound synthesizing systems is apt to be interpreted as merely a meaningless sign of trouble with pronunciation rather than a speech pattern expressing attitudes such as surprise and hesitation, although they are the same in the type of stuttering. Unlike chess and tennis, in which the result (i.e. the position of the pieces or ball) is all-important, and a beginner can score with some accidental move or shot, a high value is set on the process as well as the result in Japanese communication. A speech act is not separable from the speaker. Interpretation of the former requires judging the skill of the latter.

Keywords — stuttering, dis-fluency, skill, Japanese

1. はじめに

発話の非流ちょう性(dis-fluency)は多くの場合、意図されない。だが、非流ちょうな発話の中には、コミュニケーション行動のパターンとして確立しているものがある。現代日本語共通語（以下「日本語」）における単語内部でのつっかえは、まさに

その一例と言える。

たとえば「マ、マケドニアだったかな」「マ、ケドニアだったかな」「マーマケドニアだったかな」「マーケドニアだったかな」のように、日本語には語中での「つっかえ方」としてさまざまなものがある。つまり、発音を途切れさせる形でつっかえる途切れ型（「マ、マケドニア」「マ、ケドニア」）、発音を延伸させる形でつっかえる延伸型（「マーマケドニア」「マーケドニア」）がいずれも可能であり、また、つっかえた後に語頭に戻る語頭戻り方式（「マ、マケドニア」「マーマケドニア」）、つっかえた後にそのまま残部の発音を続行する続行方式（「マ、ケドニア」「マーケドニア」）が共に可能である。そして、これらのつっかえ方は全くランダムに現れるわけではない。我々の観察[1][2]によれば、「驚きのつっかえ」と理解されるものは途切れ型・語頭戻り方式（「マ、マケドニア！」）に限られるが、「躊躇のつっかえ」と理解されるものは上記4つのつっかえ方のいずれでもあり得るというように、態度とつっかえ方にはゆるやかな対応が観察される（図1）。これは、日本語社会では、単語内部でのつっかえは無視されるミスではなく、意味ある発話パターンとして成立しているということである。

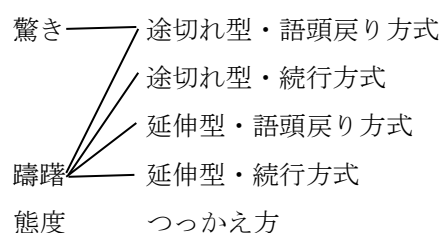


図1 態度とつっかえ方の対応

だが、冒頭にも述べたように発話の非流ちょう性は、大抵意図されるものではない。では、これら「雄弁」な非流ちょう性を生んでいるものが、話し手の意図でないとしたら、一体何なのだろうか？「驚きのつかえ」と理解されるものがなぜ途切れ型・語頭戻り方式に限定され、「躊躇のつかえ」と理解されるものになぜそのような限定がかからないのか？——これが我々の根本的な問題意識である。

この問題に対する全面的な解答はまだ得られていない。が、問題の一端は基礎的な言語スキルに関係していると我々は考えている。説明のつかない我々自身の観察「驚きのつかえ」と理解されるものは途切れ型・語頭戻り方式に限定される」に何らかの見落としがあるのではないかと検討した結果、この観察は話し手の基礎的な言語スキルに関する記述が脱落していると我々は考えるに至った。この考えによれば、或る話し手のおこなったつかえが何らかの意味ある発話パターンと理解されるにはそもそも「当該の話し手は、一つ一つの語音（上の例なら「マ」「ケ」「ド」「ニ」「ア」）を正しいアクセント（上の例なら平板型）で発音する基礎的な言語スキルがある」と解釈者に認められることが必要である。以下ではこの考えを、我々のおこなった実験を通して示す。

2. 実験の手続き

我々のおこなった実験は全部で5つある。5つの実験は全て、被験者に10個の刺激音声を開かせてその発話態度を回答させるという音声知覚実験である。被験者は日本語を母語とする関西在住の大学生（関西学院大学・甲南大学・神戸大学・武庫川女子大学（五十音順））の合計113名で、実験1（実験2）～実験5の被験者は順に、24名・22名・21名・21名・25名である。各実験の被験者どうしは重なっていない。

被験者に聞かせた10個の刺激音声は、セグメントのレベル（文字で表記可能なレベル）では5つの実験すべてに共通している。これを次の表1に示す。

表1 刺激音声のリスト

①	マ、マケドニア	⑥	ごーじゅうーろくにん
②	マーケドニア	⑦	しゃ、しゃかいげんごがく
③	カ、カモハラギンポ	⑧	しゃーかいーげんーごがく
④	カーモーハラーギンポ	⑨	な、ながいです
⑤	ご、ごじゅうろくにん	⑩	なーがーいーです

刺激音声になるだけバラエティを持たせるため、音声①②は外来語、③④は和語（但し多くの話者にとって馴染みが薄いと思える魚名）、⑤⑥は数量表現、⑦⑧は漢語、⑨⑩は述語とした。このうち奇数番号の①③⑤⑦⑨は途切れ型・語頭戻り方式のつかえを含んでおり、偶数番号の②④⑥⑧⑩は延伸型・続行方式のつかえを含んでいる。

5つの実験が異なっているのは、以上の10音声の「発し手」である。実験1・実験3では、母語話者1名（女性）に発してもらったのに対して、実験2・実験4では一聴して日本語学習者（初級）とわかる話者1名（女性）に発してもらった。さらに実験5では、音声合成ソフト（フリーソフトSpeakIt! <http://jp.foxtoo.com/download-SPEAK-it-10074310.htm>）を用いて10音声を合成した。実験1～4の発し手を女性としたのは、このソフトによる合成音声が女性の高い声を思わせるため、なるだけそれに合わせようとしたものである。

発し手に対して、実験1と実験2では「①③⑤⑦⑨は驚きのきもちで、②④⑥⑧⑩は躊躇のきもちで」という指示を出し、実験3と実験4では「読み上げで」という指示を出したが、これらの指示は以下に記すように苦肉の策と言うべきものでしかない。

我々の観察[1][2]によれば、途切れ型・語頭戻り方式の①③⑤⑦⑨は「驚き」のつかえとも「躊躇」のつかえとも解釈され得る一方で、延伸型・続行方式の②④⑥⑧⑩は「躊躇」のつかえとは解釈され得るが「驚き」のつかえとは解釈されないはずである。但し、被験者の判断には、つかえ方の違い以外の要因も影響し、その影響を除外することは容易ではない。実験1と実験2は「驚き」のつかえ・「躊躇」のつかえの姿をストレートに求めようとしたものだが、「驚きの声」「躊躇の

声」という音声自体の違いによる影響が避けられない。そこでその影響を除外するため実験 3 と実験 4 では「読み上げで」と指示したが、「読み上げ」が「驚き」と「躊躇」のちょうど中間点に位置するという保証はどこにもない。我々の素朴な直観によれば、何の態度も現れていなさそうな「読み上げ」でつかえれば、「驚き」のつかえよりは「躊躇」のつかえと解釈されやすそうだが、実際のところは不明である。

このように実験 3・実験 4 の「読み上げ」指示も問題が残るが、それでも「読み上げ」の指示のままとしたのは、態度指定ができない実験 5 の合成音声刺激との比較をも念頭に置いたためである。

実験 1～5 いずれにおいても、被験者には刺激音声を①から⑩まで、この順に、通しで 2 度呈示した。各音声刺激間の間隔は、1 度目は 10 秒、2 度目は 3 秒である。被験者には刺激音声から感じられる態度を 4 つの選択肢「驚き」「ためらい（躊躇）」「発音に手こずっている」「その他」から選ばせ、「その他」を選んだ場合は任意で自由記述させた。1 度目の呈示時における 10 秒という間隔は自由記述の可能性を想定したものである。その甲斐あってか、様々な自由記述を得たが、その一方で被験者によっては一部の刺激音声について無回答という場合もあった。複数の選択肢を選択した被験者はいなかった。

3. 実験の結果

以下、5 つの実験の結果を紹介する。まず、次の表 2 は実験 1（刺激音声は母語話者に態度指定して作成）の回答を集計したものである。表中、「ためらい」は「躊躇」、「発音に手こずっている」は「発音」と略記している。（以下も同様である。）

表 2 実験 1 の結果(数値は回答数(以下も同様))

	驚き	躊躇	発音	その他
①	24	0	0	0
②	0	21	3	0
③	24	0	0	0
④	0	6	18	0
⑤	22	2	0	0

⑥	0	22	2	0
⑦	21	2	0	1
⑧	0	9	15	0
⑨	20	3	0	1
⑩	0	22	1	1

偶数・奇数番号の条件で各選択肢の回答数に差があるかどうかについて、連関性を見るためにカイ二乗検定で分析した結果有意であった ($\chi^2(3)=211.586, p<.01$)。また、残差分析の結果から、「驚き」という選択肢において偶数番号は奇数番号よりも回答数が多いと解釈できる ($p<.05$)。この結果は我々の観察[1][2]と一致したものと言える。偶数番号の刺激音声に対して各選択肢の回答数の偏りを調べるためにカイ二乗検定を行ったところ、有意な差が認められた($\chi^2(3)=144.067, p<.01$)。ライアンの名義水準を用いた多重比較によると、「驚き」が「躊躇」より有意に高いこと ($p<.01$)、「驚き」が「発音」より有意に高いことが認められた ($p<.01$)。「その他」の自由記述は⑦が「喜びと共に楽しそう」、⑨が「実況」、⑩が「だるそう」というものであった。

次に実験 2（刺激音声は日本語学習者に態度指定して作成）の結果を表 3 に示す。

表 3 実験 2 の結果

	驚き	躊躇	発音	その他
①	13	1	4	3
②	0	9	8	4
③	10	3	4	4
④	0	4	14	3
⑤	17	0	3	2
⑥	0	9	12	0
⑦	7	0	7	7
⑧	0	4	16	2
⑨	15	2	1	3
⑩	2	3	11	5

実験 1 と同様、実験 2 においても、偶数・奇数番号の条件で各選択肢の回答数に差があるかどうかについて、連関性を見るためにカイ二乗検定で分析した結果有意であった ($\chi^2(3)=94.172, p<.01$)。また、残差分析の結果から、「驚き」と

いう選択肢において偶数番号は奇数番号よりも回答数が多いと解釈できる ($p<.05$)。この結果も我々の観察[1][2]と一致したものと言える。偶数番号の刺激音声に対して各選択肢の回答数の偏りを調べるためにカイ二乗検定を行ったところ、有意な差が認められた($\chi^2(3)=73.698$, $p<.01$)。ライアンの名義水準を用いた多重比較によると、「驚き」が「躊躇」より有意に高いこと ($p<.01$)、「驚き」が「発音」より有意に高いことが認められた ($p<.01$)。

実験 2 は「発音」の回答数が実験 1 より有意に多かった (カイ二乗検定 $\chi^2(1)=25.695$, $p<.01$)。さらに「その他」の回答数も実験より有意に多かった (カイ二乗検定 $\chi^2(1)=29.550$, $p<.01$)。また、「その他」の自由記述には①③⑤⑨について「単に詰まっている」「音読している」など、態度の誤解釈や見過ごしを思わせる記述が目立った。

このような実験 1 と実験 2 の違いは、「驚きの声」と「躊躇の声」の違いによるところが大きいのだろうか？ 読み上げの実験 3 (母語話者)・実験 4 (学習者) の結果を見てみよう。次の表 4 は実験 3 の結果をまとめたものである。

表 4 実験 3 の結果

	驚き	躊躇	発音	その他
①	7	7	7	0
②	3	10	6	1
③	6	6	8	1
④	0	7	12	1
⑤	16	3	1	1
⑥	0	18	2	1
⑦	6	5	8	1
⑧	0	11	7	0
⑨	16	2	1	0
⑩	1	11	2	4

実験 3 においても、偶数・奇数番号の条件と各選択肢の回答数の差には関連性がある ($\chi^2(3)=57.126$, $p<.01$)。また、残差分析の結果から、「驚き」という選択肢において偶数番号が奇数番号よりも回答数が多いということは、実験 3 も変わらないと言える ($p<.05$)。偶数番号の刺激

音声に対して各選択肢の回答数の偏りを調べるためにカイ二乗検定を行ったところ、有意な差が認められた($\chi^2(3)=72.204$, $p<.01$)。ライアンの名義水準を用いた多重比較によると、「驚き」が「躊躇」より有意に高いこと ($p<.01$)、「驚き」が「発音」より有意に高いことが認められた ($p<.01$)。「その他」の自由記述としては、実験 1 の自由記述にあった「喜びと共に楽しそう」といった記述が無くなり、⑥に「確認？」、⑩に「遠回しに不満を述べている」「大変だと思っている」「本心でない」という記述があった。

次の表 5 は実験 4 の結果をまとめたものである。

表 5 実験 4 の結果

	驚き	躊躇	発音	その他
①	2	3	16	0
②	0	9	5	2
③	0	4	17	0
④	1	5	12	3
⑤	5	3	13	0
⑥	0	7	11	3
⑦	4	6	8	3
⑧	0	8	13	0
⑨	12	1	7	1
⑩	0	14	5	2

実験 4 においても、偶数・奇数番号の条件と各選択肢の回答数の差に関連性がある ($\chi^2(3)=36.007$, $p<.01$)。また、残差分析の結果から、「驚き」という選択肢において偶数番号は奇数番号よりも回答数が多いということは、やはり実験 4 も変わらないと言える ($p<.05$)。偶数番号の刺激音声に対して各選択肢の回答数の偏りを調べるためにカイ二乗検定を行ったところ、有意な差が認められた($\chi^2(3)=62.640$, $p<.01$)。「その他」の自由記述としては④に「強調」、⑥に「数えた感じ」というものがあつた。

実験 4 は「その他」の回答数に関しては実験 3 と有意差はないものの、「発音」の回答数に関しては実験 3 よりも有意に多かった (カイ二乗検定 $\chi^2(1)=25.791$, $p<.01$)。これは、先述のように実験 2 が「発音」の回答数に関して実験 1 よりも有

意に多かったことと並行する．つまり，驚きの声と躊躇の声の全体的な違いを捨象し，つかえ方の違いだけを「読み上げ」環境で取り出しても，母語話者のつかえは態度が感じられやすいのに対して，学習者のつかえは態度が感じられにくく，単なる発音のトラブルととられやすいと言える．

では，合成音声はどうだろうか．次の表 6 は実験 5 の結果をまとめたものである．

表 6 実験 5 の結果

	驚き	躊躇	発音	その他
①	7	2	1	15
②	0	2	11	11
③	5	1	5	14
④	0	3	14	8
⑤	8	6	3	8
⑥	2	4	11	8
⑦	2	2	12	9
⑧	0	1	16	8
⑨	17	2	1	5
⑩	2	1	12	10

実験 5 においても，偶数・奇数番号の条件と各選択肢の回答数の差に関連性がある ($\chi^2(3)=49.538, p<.01$)．また，残差分析の結果から，「驚き」という選択肢において偶数番号は奇数番号よりも回答数が多いということは，実験 5 も実験 1～実験 4 と同様であった ($p<.05$)．偶数番号の刺激音声に対して各選択肢の回答数の偏りを調べるためにカイ二乗検定を行ったところ，有意な差が認められた ($\chi^2(3)=77.871, p<.01$)．ライアンの名義水準を用いた多重比較によると，「驚き」が「発音」より有意に高いこと ($p<.01$)，「驚き」が「その他」より有意に高いこと ($p<.01$) が認められた．

実験 5 は「その他」の回答数が実験 3 よりも有意に多く ($\chi^2(1)=64.952, p<.01$)，「その他」の自由記述としては全体的に「ただ話まっただけ」「感情がこもっていないのでわからない」「機械的でどうともとれない」「アナウンス的で感情を感じない」「詰まっている」という記述が

目立った．
また，「発音」の回答数は実験 3 との間に有意差がないが，アクセントが共通語のアクセントから大きく外れている刺激音声と (②④⑥⑩)，拗音 (「しゃ」) が正しく実現できていない刺激音声 (⑧) の 5 つに限定すると，実験 3 の 5 つとの間に有意な差が見られた ($\chi^2(1)=7.808, p<.01$)．
刺激音声が母語話者の音声でない場合 (実験 2・実験 4・実験 5) を全体で見ると，母語話者の音声である場合 (実験 1・実験 3) と比べて，「発音」が有意に多く (カイ二乗検定 $\chi^2(1)=46.280, p<.01$)，「その他」も有意に多かった (カイ二乗検定 $\chi^2(1)=71.272, p<.01$)．

4. 発話の意味と話し手のスキル

以上から言えるのはまず，驚きとつかえ方との結びつきの強さである．驚きのつかえが途切れ型・語頭戻り方式に限られるという我々の観察 [1][2]は，5 つの実験すべてにおいて，つまり読み上げ調であっても，学習者の音声や合成音声であっても，傾向として認められた．
そしてその上で言えるのは，つかえの解釈が話し手のスキル (の認定) に影響されるということである．学習者の音声にせよ合成音声にせよ，語音やアクセントが正しく実現できていないと認定されれば，母語話者と同じ型と方式でつかえても，単なる発音のトラブルや意味不明の発話と片付けられがちで，驚きや躊躇のつかえとは理解されにくい．驚きや躊躇のつかえは，正しい語音やアクセントの実現といった日本語の基礎的スキルを習得した，柔道でいえば「黒帯」の有段者に限って認定される行動だということである．つかえが話し手の態度を語り「雄弁」であるためには，まず，話し手の基礎的スキルが必要とされる．
再び競技のたとえを持ち出すと，チェスやテニスは結果 (つまり駒やボールの位置) が全てある．たとえ初心者でも，深く考えず適当に置いた駒が妙手となったり，滅茶苦茶に振り回したラケットにボールが当たって絶妙なショットとなったりし

て、得点をあげることは有り得る。だが、以上で示してきたことからすれば、我々のコミュニケーションは、もっと「人を見る」もののようである。結果だけでなく過程も含めた全体が重視され、相手のつかえ発話の意味は、相手を見て解釈される。

たとえば「リンゴ」という語は、その場にリンゴがなくても発することができ（脱場面性(displacement)[3]）、また、いつ・どこで・誰が・どのように発しようとも、「リンゴ」と聞き取れさえすれば、バラ科の落葉高木あるいはその果実が意味される。もちろん、いつ・どこで・誰が発するかによって意味が変わってくる「昨日」「ここ」「私」のようなことばも、直示性(deixis)[4]あるいは指標性(indexicality)[5]のことばとして知られているし、我々は言語の意味だけでなく文法も根本的には発話状況と結びついていると考えている[6]。だがそれでも、「いつ・どこで・誰が発しても変わらない」という発話状況から切り離された性質が言語の一面に備わっていることは否定しがたい。

相手のつかえ発話の意味が相手を見て解釈されるという以上の観察が正しければ、つかえはこの性質を部分的にせよ欠いたものということになる。驚きのつかえが途切れ型・語頭戻り方式に限られるといった、「雄弁」なつかえの規則性は、いわゆる「通常」の文法とは違ったあり方をしているようである。

5. 発話の意図とスキル

では、つかえのような非流ちょうな発話の意味解釈に話し手のスキルが関わるのはなぜなのだろうか？ 冒頭で述べた発話の非流ちょう性と意図の関係を、ここで再度考えてみたい。

多くの場合、非流ちょう性は意図されないが、「話し手は非流ちょう性を意図している」と聞き手が判断することはある。そしてそれは、発話の印象に大きな影響を与えるようである。次に紹介するのは、言いさし（発話の途絶 [7]）という非流ちょうな発話行動が意図的におこなわれたと聞

き手に判断された場合についての太田の記述[8]の一部である。

Xはロシア語を母語とする日本語学習者だが、超級に属し、ロシアの一地方の日本語教育を束ねる立場にある。そこに日本から日本語教師として赴任してきたYは、ロシア語が不得手で、ことあるごとにロシア語の通訳を周囲に頼んでいる。Yがロシア語が不得手だということは皆に知られている。或る日、日本語で行われたスタッフ会議の中で、XはYに、翌日行われる祭りに行ってみよう、次のように勧めたと言う。

X：明日のお祭りは、とても有名なので是非Yさんも見に行ってください。で、Yさんはロシア語は… [ずっとYを見る]

Y：できません(笑)

X：なら学生Zも行きますから、通訳してもらってください。

この時、Yは「自分がロシア語ができないことは公然の事実なのだから、はっきり言ってくれてもいいのに」という感慨を持ち、自分の「できません」発言を待ちつづけるXに違和感を持ったと言う。このXは、公的な場でYの無能力を口にするという暴挙を避けて自身の『いい人』キャラを守り、Yとの良好な関係を保持しようとして「Yさんはロシア語は…」という非流ちょうな言いさしに及んだと考えられるが、その意図をYに察知されてしまったことで、目論見が失敗してしまったと言える。

このように「雄弁」な非流ちょう性が雄弁であるために非意図が必要なものとすれば、スキルはその非意図性を下支えするものと位置づけられる。「雄弁」な非流ちょう性のパターンを、意図せずにおこなえるのは、高いスキルがあればこそだということである。「途切れ型・語頭戻り方式で驚きのつかえ発話をしよう」といった意図なしで、「思わず・何気なく」途切れ型・語頭戻り方式でつかえて驚いたと解釈されるには、それだけの日本語スキルが要求されるということは理解できるだろう。

6. まとめ

この発表で述べたことは、以下4点にまとめられる。

第1点. 日本語の非流ちょう性の中には話し手の態度と結びついた「雄弁」なものがある。この結びつきに関する我々の観察「驚きのつかえは途切れ型・語頭戻り方式に限られる」は、読み上げ調や学習者音声・合成音声をも刺激音声を含めた知覚実験においても傾向として認められる。

第2点. そのようなつかえ発話の「雄弁」性は、語音やアクセントを正しく実現できるという、話し手のスキル（の認定）を前提としている。学習者の音声にせよ合成音声にせよ、語音やアクセントが正しく実現できていないと認定されれば、母語話者と同じ型と方式でつかえても、単なる発音のトラブルや意味不明の発話と片付けられがちで、驚きや躊躇のつかえとは理解されにくい。

第3点. このことから考えられるのは、我々のコミュニケーションには、「人を見る」という一面があるということである。相手のつかえ発話の意味は、相手を見て解釈される。発話が話し手から独立しきれていないという点で、「雄弁」な非流ちょう性は、いわゆる「通常」の文法とは違ったあり方をしていると考えられる。

第4点. このようなスキルの必要性は、「雄弁」な非流ちょう性発話があくまで非流ちょうなものとして、思わず、何気なく、非意図的におこなわれなければならないというところから来ているのではないか。

なお、この発表では「雄弁」な非流ちょう性の発話に関して母語話者の優越性を述べることになったが、これは「雄弁」な非流ちょう性が学習者や音声合成システムには獲得不能ということの意味しているわけではない。合成音声を刺激音声とした実験5の⑨は、語音にもアクセントにも問題がなく、「発音」「その他」の回答数が少ない。語音やアクセントに関するスキルを高め、この⑨のようなケースを増やすことで、非母語話者がこれらの「雄弁」な非流ちょう性発話をマスターすることは可能であろう。

ここで述べたことが、つかえだけでなく、他のタイプの「雄弁」な非流ちょう性発話にも当てはまるのか、たとえばフィラー「えーと」はいかにも学習者らしい不正確な語音とイントネーションで発しても検討中と解釈されるのか、丁寧さを醸し出す言いさしは話し手のスキルと関係ないのかといった問題の検討は、今後の課題としたい。

謝辞：統計処理に関してご協力いただいた羅希氏・林萍萍氏に感謝する。また、この発表は日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(A)（課題番号：23242023, 15H02605, 研究代表者：定延利之）の成果の一部である。

参考文献

- [1] 定延利之, (2005) ささやく恋人, りきむレポーター：口の中の文化, 岩波書店.
- [2] 定延利之・中川（モクタリ）明子, (2005) “非流ちょう性への言語学的アプローチ：発音の延伸・とぎれを中心に”, 串田秀也・定延利之・伝康晴(編)文と発話 1: 活動としての文と発話, pp. 209-228.
- [3] Hockett, Charles, (1960) “The origin of speech”, *Scientific American*, No. 203, pp. 89-97.
- [4] Bühler, Karl, (1934/1982) “The deictic field of language and deictic words”, Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds.), *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, Chichester: Wiley, pp. 9-30.
- [5] Silverstein, Michael, (1976) “Shifters, linguistic categories, and cultural description”, Keith H. Basso and Henry A. Selby (eds.), *Meaning in Anthropology*, Albuquerque: University of New Mexico Press, pp. 11-15.
- [6] 定延利之, (2015/5/16) “日本語の文法と発話状況の結びつき”, 津田塾大学「言語の対照および類型論的研究の会」主催研究集会「言語における Evidentiality, ‘Reality’ を考える」(津

田梅子記念交流館）招待講演.

[7] 白川博之, (1997) 「言いさし文」の研究, くろしお出版.

[8] 太田悠紀子, (2014/3/29) “日本語学習者の語用論的能力習得”, 日本語プロフィシエンシー研究会春合宿（湯の花温泉「烟河」）ポスター発表.